経済と政治との関連の問題（八）

——いわゆる「トロツキズム」の性格規定——

山本二三丸

二十三

さて、一九〇三年第二回党大会での分裂から一九〇五年第一次革命勃発にいたるまでの間にメンシェヴィキがはやくも「前衛組織」としてどのような性格を示していたか、それが「前衛党」としてどんな「闘争方針」をうちだしていたものかということは、前節においてほぼあきらかにされたので、つぎにいよいよ、一九〇五年にはじまるロシア第一次革命に当面して、ボリシェヴィキとメンシェヴィキとがどのような戦術をもってたちむかったか、ということを検討することにしよう。そして、両派の戦術を検討したのちに、一九〇五―一九〇七年革命にたいする両派の評価をもとりあげてみる必要があるであろう。そこで、両派の戦術について吟味するために、まず、それらの戦術を生みだした当の背景、つまり、第一次ロシア革命がはじまった当時の情勢について、だいたいの観念をつかんでおくことにしたいとおもう。

一九〇五年一月九日のいわゆる「血の日曜日」の事件の報道を聞いて、ジュネーヴにあったレーニンはすぐさま、

『ロシアにおける革命の始まり』と題する論説をその機関誌『フペリョード』第四号（一月三十一日付）に載せると同時に、同じ号に「革命の日々』と題する小論集を発表しているので、参考までにそのなかから若干のものをえらんで引用することにしよう。はじめにあげるのは、後者のうちの『第一歩』と題する小論のうちのものである。（……は中略を示す）。

「火事を発火させた火花となったのは、労資のもっともありふれた衝突のひとつ――ある工場のストライキであった。ところが興味あることには、一月三日の月曜日に勃発したプチロフ工場のこのストライキは、なによりも多くプロレタリア的連帯性のためのストライキであった。きっかけとなったのは、四名の労働者の解雇である。ペテルブルグの一同志は一月七日にわれわれにこう書いてよこした。――「彼ら解雇者の要求がいれられなかったとき、工場はただちにひじょうな一致をみせて立ちあがった。ストライキはまったく自制力ある性格をおびている。労働者たちは、機械その他の財産が意識の低い連中のためにもしか毀損されることのないよう、それをまもるために幾人かの人間を派遣した。ついで他の諸工場に代表団を派遣し、自分たちの要求をつたえストライキへの同調を申しいれた」。数千数万の労働者が、運動に同調しはじめた。系統的に君主主義的宣伝をおこなってプロレタリアートを堕落させる目的で政府の援助のもとに設立された、合法的なズバトフ派の労働者協会は、運動の低い段階では運動を組織し、それを横へ発展させることにすくなからず貢献した。社会民主主義者がすでに早くから指摘していたことがおこったのである。社会民主主義者は、労働者階級の革命的本能と彼らの連帯性の精神は、いっさいのくだらない警察の術策にうちかつであろう、とズバトフ派に言ってきた。もっともおくれた労働者はズバトフ派によって運動に引きいれられるであろうが、そうなればそのさきには、ツァーリ政府みずからが労働者をもっとさきにおしすすめるように配慮するで

あろうし、資本主義的搾取そのものが、彼らをおだやかな、骨の髄まで偽善的なズバトフ運動から、革命的な社会民主党へとおしすすめるであろう。プロレタリアの生活とプロレタリアの闘争の実践は、ズバトフ派の諸君のすべての『理論』とすべての大骨折りに打ちかつであろう、と。

結果は、そのとおりになった。ロシア社会民主労働党ペテルブルグ委員会のメンバーであるひとりの労働者の同志は、一月五日付のわれわれへの手紙のなかで、つぎのように自分の印象を述べている。

「わたしは、たったいまネフスキー門外でおこなわれたセミャンニコフ工場の労働者の集会のなまなましい印象のもとにこの手紙を書いている。しかし、まずはじめに、ペテルブルグの労働者のあいだに支配している気分について二、三言述べよう。周知のように、最近ここでは、坊主ガポンの指導のもとに『ズバトフ派』の諸組織が生まれはじめた、またはもっと適切にいえば、復活しはじめた。これらの組織は、ごく短期間のあいだにひじょうにふえて、強大になった。いまではすでに、いわゆる『ロシア工場労働者会議』の支部が一一ある。当然予期されたように、これらの会議の結果は、南部におけるものと同じでなければならなかった。

いまや、ペテルブルグには広範なストライキ運動がはじまりつつあると確信をもっていうことができる。ほとんど毎日のように、あるいはここ、あるいはあそこの工場での新しいストライキのことを耳にする。プチロフ工場がストライキにはいってから二日になる。……

……きょうネフスキー造船工場労働者の集会があった。約五百名の労働者があつまった。はじめには「会議」の地元支部の会員たちが演説した。彼らは政治的要求を回避し、おもに経済的要求を提出した。群衆のなかから不賛成の声があがった。だが、そこに『ルースカヤ・ガゼータ』の寄稿家でペテルブルグ労働者のあいだで大きな尊敬をかち

えているストローエフが現われた。ストローエフは、彼が言明したところによると、彼と社会民主党の代表とで作成したという決議を提出した。この決議はプロレタリアートとブルジョアジーとの階級利害の対立を強調してはいるが、十分ではなかった。ストローエフのあとで発言したのは、社会民主主義者の労働者同志たちであったが、彼らは、この決議を原則的に擁護しながらも、その限界性と不十分さを強調した。すると混乱がおこり、一部のものは、社会民主主義者たちの演説に不満をいだき、集会のぶちこわしをはじめた。集会は、このぶちこわし屋の仲間の一人であった議長に多数決で反対を表明し、社会主義者の新しい議長を選出した。しかし『協会』（ズバドフ派の）会員たちはだまらずに、ひきつづき集会を攪乱した。集会の大多数（九〇％）は社会主義者に味方していたのだが、結局集会はなんのうるところもなく、解散し、決定を明日までもちこした。いずれにせよ、社会民主主義者は労働者の気分を自分に有利なほうに傾かせることに成功した、といってよかろう。あす大集会があることになっている。――二、三千名来るかもしれない。――ここ数日中に、一九〇三年の南部での七月デモンストレーションくらいの大がかりなデモンストレーションがおこるものと期待すべきである。フランス＝ロシア会社の工場の約四、五千名がストライキをやっている。シチグリツの紡績工場で約五千名のストライキがはじまった、とつたえられている。オブーホフ工場の五、六千名のストライキが期待されている。」

党地方委員会の委員であるこの社会民主主義者（もちろん、彼はペテルブルグの一小部分における事件しか正確には知りえなかった）のこれらの情報を、外国の新聞、とくにイギリス新聞の情報と対照してみると、われわれは、右にあげた情報は全くきわめて正確だという特徴をもっている、という結論をくださなければならない。

ストライキは、日一日とめまぐるしい速さで成長してきた。労働者は、多くの集会をもよおし、彼ら自身の「憲

章」、すなわち、彼ら自身の経済的要求と政治的要求とをつくりあげた。この経済的要求も政治的要求も、ズバトフ派の指導にもかかわらず、普通・直接・平等・秘密選挙権にもとづく憲法制定議会の召集というスローガンまでをふくめた社会民主党の綱領の要求に、だいたい帰着していた。その規模からいってこれまでにない、このストライキの自然発生的な成長は、組織された社会民主主義者の計画的な運動参加をはるかに、はるかに追いこしていた。しかし、彼ら自身に発言させよう」（全集第四版、第八巻、九四―九七ページ、傍点―レーニン）。

「ズバトフ主義」すなわち「警察社会主義」の唱導者であるモスクワ秘密警察部長、ズバトフ憲兵大佐の指図のもとに組織された「ロシア工場労働者会議」が、労働者を堕落させ、革命的意識を麻痺させる御用組合的機関にすぎないこと、そして、この「会議」が労働者の低い層のおくれた意識を拠りどころとし、またこれを強化するためにもっぱら「純経済闘争」にその活動を限定しようとしたことは、すでに周知のところである。だが、右の引用のなかで大切なことは、この「警察社会主義」的御用組合活動が、メンシェヴィキ派によって、したがってまたトロツキー自身らによって、強力にバック・アップされていたということ、政治的要求を出すことは言葉たくみにこれを抑えつけ、もっぱら純経済的要求を出すことに労働者の眼をあつめようとして、「警察社会主義」と「経済主義」および「ブルジョア自由主義」との三者が緊密に結びつきあい提携しあっていたこと、この三者の「連合」を体現していたのが実にストローエフそのひとにほかならないということ、これら三者のけんめいの「説得」と「抱きこみ」と「恫喝」にもかかわらず、労働者大衆のストライキ運動の自然成長的な盛りあがりは、経済闘争の枠をこえて政治闘争にまで発展し、こうしてメンシェヴィキ（もちろん、トロツキーらをふくめて）の影響下からボリシェヴィキの指導下への労働者大衆の決定的な移り行きがはっきりとあらわれるにいたった、という事実である。

そこで、つぎに、『血の日曜日の前夜』と題された小論によって、革命勃発の「前夜」の事情をうかがうことにしよう。

「……すでに一月八日の土曜日には、ペテルブルグのストライキは、ゼネラル・ストライキになった。官庁情報でさえ、罷業者の数を一〇万ないし一五万と見積っていた。ロシアは、階級闘争のこのような巨大な爆発をまだ見たことがない。人口一五〇万の大中心都市の工業・商業・社会の全生活が麻痺した。プロレタリアートは、彼らによって、しかも彼らによってのみ、現代の文明が支えられており、彼らの労働によって富と贅沢が創造されており、彼らの上にわれわれの文化全体が立脚していることを、実地に示したのである。……しかも、**このゼネラル・ストライキは、明確に表現された政治的性格をおびており、もろもろの革命的事件の直接の序幕であった。**

ある目撃者は、われわれへの手紙のなかでこの歴史的な日の前夜をこうえがいている。

「一月七日からペテルブルグのストライキはゼネラル・ストライキになった。大工場の全部ばかりか、多くの仕事場も止まった。……運動の指導権は、これまでのところズバトフ派の手にある。われわれはペテルブルグでいままでかつて見たことのない光景を見ており、未知のものにたいする恐怖で心臓がちぢまる思いである。――社会民主党組織は、たとえしばらくたってからでも運動を自分の手ににぎることができるだろうか。情勢はきわめて重大である。このところ、市のすべての地区で『ロシア労働者同盟』の建物のなかで労働者の大衆集会が毎日おこなわれている。これらの建物の前の街路は、一日中、幾千の労働者であふれている。ときどき社会民主主義者が演説をおこない、ビラをまいている。ズバトフ派はこれに反対運動を組織しようとこころみているけれども、それらの演説やビラは、大体において共感をもってむかえられている。演説が専制のことにふれると、ズバトフ派は、「それはわれわれには関係がない。専制はわれわれを邪魔してはいない！」とさけぶ。ところが、『同盟』の建物のなかでズバトフ派がやっている演説では、八時間労働日にはじまり、平等・直接・秘密選挙にもとづく人民代表の召集にいたるまで、社会民主党のすべての要求が提出されている。ズバトフ派だけが、こういう要求をみたしても専制の打倒とはならないで、人民

をツァーリに近づけることになり、ツァーリを人民から切りはなしている官僚制度を廃絶することになる、と主張している。

……実際的な提案の提唱は、ズバトフ派から出ている。社会民主主義者の反対にもかかわらず、これらの提案は採択されている。これらの提案は、つまるところ、つぎのようなものである。一月九日の日曜日に労働者は冬宮に行進し、労働者の要求を全部列挙して、「このすべてをわれわれにください。でないとわれわれは死んでしまいます」という言葉で結んである、ツァーリあての嘆願書を、聖職者ゲオルギー・ガポンを通じて上呈しなければならない、というのである。そのさい、集会の指導者たちは、つぎのようにつけくわえている。「もしツァーリがそれをあたえてくれないなら、そのときにはわれわれの手は自由に解きはなされることになる。――つまり、ツァーリはわれわれの敵だということになり、そうなればもうわれわれは、赤旗をひるがえして彼に立ちむかうであろう。もしわれわれの血が流れるなら、その血はツァーリの頭にかかるであろう」。嘆願書は、どこでも採択されている。……

これらすべてのことは、警察の完全な黙認のもとでおこなわれている。……

きょう、通りには、多数聚合を禁止し、さかなければ武力を用いるという、特別市長官の布告がかかげられている。労働者はこれらの布告をやぶりとっている。軍隊は周辺地域から市内に集結されている。……」（前出、九八―一〇〇ページ、傍点―レーニン、ゴシック体―山本）。

では、問題の「血の日曜日」における事態の経過は、どのようなものであったか？　同じ論稿のうちの小論「『父なるツァーリ』とバリケード」によってみてみよう。

「血の日曜日の事件を概観して、いちばん驚かされるのは、ツァーリにたいする素朴な家父長的信仰と、武器を手にしてツァーリ権力に抗するはげしい市街戦とがこのように結びついていることである。ロシア革命の第一日は、驚くべき力で古いロシアと新しいロシアとを面と向いあわせ、父なるツァーリにたいする大昔からの農民の信仰の死の苦悶と、都市プロレタリアートに代表される革命的な人民の誕生とをしめした。ヨーロッパのブルジョア新聞が、一月十日のロシアはもはや一月八日のロシアとはちがったものである、と述べているのは、理由のないことではない。わ

れわれが上にあげたドイツ社会民主党の新聞〔『フォアヴェルツ』〕が、どのようにして七〇年前にイギリスで労働運動がはじまったか、どのようにして一八三四年にイギリス労働者が街頭デモンストレーションによって労働者団体の禁止に抗議したか、どのようにして一八三八年に彼らがマンチェスター近郊の大規模な集会で「人民憲章」を作成し、スティーヴンズ牧師が「自由な神の空気を呼吸し、自由な神の土地を歩くすべての自由人は、自分自身のかまどをもつ権利をもっている」と宣言したかに、記憶を促しているのは、理由のないことではない。しかも、この同じ牧師があつまった労働者に武器をとるように勧告したのである。

わがロシアでも運動の先頭に立っていたのは一人の聖職者であったが、一日のあいだに彼は、平和請願書をもってツァーリ自身のところに行け、という呼びかけから、革命をはじめよ、という呼びかけに移っていった。聖職者ゲオルギー・ガポンは、流血の日ののち、自由主義者の一集会で読みあげられた手紙のなかに、つぎのように書いている。「同志諸君、ロシアの労働者諸君！　われわれにはもうツァーリはいない。きょう、ツァーリとロシア人民とのあいだに鮮血の川がながれた。ロシアの労働者がツァーリぬきで、人民の自由のための闘争をはじめるべきときがきた。きょうは私は諸君に祝福をあたえる。あすは私は諸君の仲間のひとりとなるだろう。きょうの私はわれわれの事業のための仕事に忙殺されている」。

これは、聖職者ゲオルギー・ガポンが語っているのではない。これを語っているのは、これまで父なるツァーリを無邪気に盲目的に信じこみ、自分の耐えがたく苦しい状態の軽減の手段を父なるツァーリ「ご自身」に求め、あらゆる無法、暴行、専横、略奪について、ツァーリをあざむく官吏だけを非難するような状態にあった数千、数万、数百万、数千万のロシアの労働者と農民である。虐げられ、野蛮にされ、へんぴな片隅に投げやられた百姓生活の長い世

代が、この信仰をうちかためた。新しい、都市の、工業的な、読み書きの知識のあるロシアの生活の一月一月は、この信仰を掘りくずし打ちこわしてきた。この十年間の労働運動は、まったく意識的にこの信仰と絶縁した何千という先進的な社会民主主義的プロレタリアをおくりだした。それは数万の労働者を教育したし、ストライキ闘争や政治的煽動のなかでつよまった階級的本能が、これらの労働者のもっていたこういう信仰の基礎をみなうちこわした。しかし、これらの数千数万の労働者のうしろには、勤労し、搾取され、いやしめられ、侮辱された人々、すなわち、プロレタリアと半プロレタリアがおり、彼らのうちにはこのような信仰もまだ残ることができた。彼らは蜂起にたつことはできなかった。彼らはただ懇願し哀願することしかできなかった。彼らの感情と気分、彼らの知識と政治的経験との水準を表現したものこそ、聖職者ゲオルギー・ガポンである。そしてこの点にこそ、きのうはまだ無名の人間であったが、きょうはペテルブルグのときの大立物となり、ペテルブルグにつづいて全ヨーロッパの新聞の大立物となった人間が、ロシア革命の発端に演じた役割の歴史的意義がある。

われわれが上欄にのせた手紙の筆者であるペテルブルグの社会民主主義者が、なぜ、はじめにガポンにたいして不信の態度をとったか、またとらざるをえなかったかは、いまや明らかである。法衣をまとい、神を信じ、ズバトフと保安警察の手厚い保護をうけて行動してきた人間は、疑惑の念をおこさせないわけにはいかなかった。……このことに解答をあたえることのできたのは、展開されていく歴史的諸事件だけであり、一にも二にも三にも事実だけであった……(96)

社会民主党は、この自然発生的な運動を制御することができるであろうか?——わがペテルブルグの同志たちは、ゼネラル・ストライキがプロレタリアートの異常に広範な層をまきこんで、おさえようのない力で急速に成長してい

るのを見た。また挑発者にでも魅惑されかねない「無知な」大衆にたいするガポンの抗しがたい影響力を見て、不安にかられて自問した。そして社会民主主義者は、平和的な請願をやることが可能だという素朴な幻想を支持しなかったばかりでなく、またガポンと議論をたたかわした。彼らは、自分のすべての見解と自分の全戦術とを率直に断固として主張した。そして、社会民主党ぬきで労働者大衆がつくりだした歴史は、これらの見解とこの戦術の正しさを確認した。プロレタリアートの階級的地位の論理は、ガポンの誤り、素朴さ、幻想よりも力強いものであった。ツァーリの名において、そしてツァーリの全権力をもって行動しているヴラヂーミル大公は、社会民主主義者がこれまでつねに印刷文書や口頭で労働者大衆に示してきたし、また将来も示すであろうこと、ほかならぬそのことを、死刑執行人としてのその武勲によって労働者大衆に示す仕事を引受けたのである。

ツァーリにたいする信仰の名残りをまだ保存していた労働者農民の大衆は、蜂起に立つことができなかった――と、われわれは言った。一月九日以後にはわれわれは、いまでは彼らは蜂起にたつことができるし、またたつであろう、と言う権利をもっている。「父なるツァーリ」は、武器をもたない労働者に流血の制裁を加えることによって、みずから彼らをバリケードに追いやり、バリケード闘争の最初の教訓を彼らに与えた。「父なるツァーリ」の教訓は、むだに終ることはないであろう。

社会民主党にのこされている仕事は、ペテルブルグの流血の事件にかんする情報をできるだけ広範にひろめ、自分の勢力をいっそう結束させ、組織化し、党がすでにはやくから提起してきた全人民の武装蜂起というスローガンをいっそう精力的に宣伝するために配慮することである」（前出、九一―九三ページ、傍点―レーニン）。

（96）　ここでレーニンは、「もろもろの事実は、この問題にたいして、ガポンに有利な解答をあたえた」と述べているが、しか

し、これは事態の推移によって、おそらくガポン自身の意図に反して、そうなるべくしてなったもの、というべきであろう。レーニンも、この同じ論稿のうちに『僧侶ガポン』と題する小論をもうけて、ガポンの「分析」をおこない、「僧侶ガポンは挑発者であるという推測は、彼がズバトフ協会の参加者であり領袖であるという事実によって裏書きされているように見える」（前出、八五ページ）と述べ、「それがどうであったにせよ、この新しい首領にたいする社会民主主義者の戦術は、おのずからさだまっている。それは、ズバトフ派にたいする用心深い、形勢観望的な心を許さぬ態度が必要だ、ということである。いずれにせよ、もりあげられた（たとえズバトフ派によってもりあげられたにせよ）ストライキ運動に精力的に参加し、社会民主党の見解とスローガンを精力的に伝道することが、必要である」（前出、八六ページ）と教示している。このレーニンの教示と、半年前から自分自身が音頭をとって準備してきたゼネ・ストをどたんばにきて「敵の挑発によるもの」だとして精力的にそのぶちこわしに狂奔したかっての「四・一七スト裏切り」とをつきあわせてみれば、わが「日共指導層」がどんなに堕落した修正主義的な反革命集団であるかはこのうえもなく明らかとなる。なお、保安警察の指令によってツァーリに嘆願しようという挑発的計画を労働者大衆に提案し、一月九日の「血の日曜日」の虐殺を準備したガポンは、事件後一時国外に逃避し、翌年ロシアにかえってふたたび保安警察とつながりをもち、ガポン組織の復活をはかったが、一九〇六年、ペテルブルグ郊外で、彼の裏切り的＝挑発的行動を確信した労働者たちによって絞首に処せられることになるのである。

そこで、はじめに挙げたレーニンの論文『ロシアにおける革命の始まり』の主な部分をつぎにかかげることにしよう。ここには、すでにボリシェヴィキの革命的戦術の基本が明確にうちだされていることがうかがわれるのである。

「きわめて偉大な歴史的事件がロシアにおこっている。プロレタリアートはツァーリズムに反対してたちあがった。プロレタリアートは政府によって蜂起に駆りたてられたのだ。政府が、事態を軍事力の使用にまでもっていこうとおもって、わざと比較的妨害を加えずにストライキ運動が発展するままにまかせ、また広範なデモンストレーションがはじまるままにまかせたということには、いまではほとんど疑う余地がない。そして、政府は事実そこまで事をもっていったのだ！　何千もの死者と負傷者――これがペテルブルグにおける一月九日の血の日曜日の総決算である。軍

隊は、武器をもたない労働者や婦人子供をうちやぶった。軍隊は地に伏していた労働者に射撃を浴びせて、敵を征服した。「われわれは彼らに良い教訓をあたえてやった！」――ツァーリの召使どもや、ヨーロッパにおける保守的ブルジョアジーの陣営に属する彼らの従僕たちは、いま名状しがたい鉄面皮さでこう言っている。

そうだ、教訓は偉大なものだった！　ロシアのプロレタリアートはこの教訓を忘れはしないだろう。……

労働者階級は内乱の偉大な教訓をえた。プロレタリアートの革命的教育は、平凡な、日常の、うちのめされた生活の幾月幾年によってもなしとげえないほどの前進を、一日のうちになしとげた。「死か、それとも自由か！」という、英雄的なペテルブルグのプロレタリアートのスローガンは、いまやロシア全土にこだましてひびきわたっている。……

革命はひろがっている。政府はすでにあがきはじめている。政府は、血の弾圧の政策から経済上の譲歩にうつり、九時間労働日の施しものまたは約束でお茶をにごそうとこころみている。だが、流血の日の教訓はむだに過ぎさるはずはない。蜂起したペテルブルグの労働者の要求――普通・直接・平等・秘密の選挙権にもとづく憲法制定議会の即時召集――は、すべてのストライキ労働者の要求となるにちがいない。政府の即時打倒――これこそ、ツァーリを信じてさえいたペテルブルグの労働者が一月九日の虐殺にたいする回答として出したスローガンであり、この流血の日のあとで「われわれにはもうツァーリはない。血の川が人民とツァーリとをへだてている。自由のための闘争万歳！」と言った、彼らの指導者、僧侶ゲオルギー・ガポンの口を借りて、彼らが回答として出したスローガンである。

革命的プロレタリアート万歳！　と、われわれは言おう。ゼネラル・ストライキは、労働者階級および都市貧民のますます広範な大衆を立ちあがらせ、動員している。人民の武装は、革命的時機の当面の任務の一つとなっている。**武装した人民だけが、人民の自由の真の支柱となることができる。**そして、プロレタリアートが武装に成功するこ

とがはやければはやいほど、彼らが革命的ストライキ参加者というその軍事的地位をながくもちこたえればもちこたえるほど、それだけはやく軍隊は動揺するであろうし、それだけ多く兵士のあいだに、自分がなにをしているかをついに理解して、人非人どもに反対し、暴君に反対し、武器をもたない労働者やその妻子の殺害者に反対して、人民のがわに立つ人々が出てくるであろう。ペテルブルグそれ自体における現在の蜂起がどういう結果に終ろうとも、いずれにせよそれは、きっと、かならず、さらにいっそう広範な、いっそう意識的な、いっそうよく準備された蜂起への、第一段階となるであろう。政府はあるいはその償いの時を延期することに成功するかもしれないが、しかしその延期は、革命的攻撃のつぎの一歩を、もっと巨大なものにするばかりであろう。その延期は、組織された闘士の隊列を結束させ、ペテルブルグの労働者の先鞭についての報道をひろめるために、社会民主党によって利用されるばかりであろう。……蜂起した人民は、ツァーリ専制のありとあらゆる政府機関をひっくりかえし、憲法制定議会の即時召集を宣言しはじめるだろう。

労働者および一般にすべての市民の即時武装、政府官庁と諸機関とを破砕するための革命勢力の準備と組織――これこそが、そのうえに立ってありとあらゆる革命家が共同の打撃を加えるために結集することができ、また結集しなければならない、実践的な土台である。プロレタリアートは、社会民主党とのその結びつきを弱めることなく、またあらゆる搾取からの全人類の解放という、その偉大な終局目標を銘記しつつ、独自の道をつねにすすまなければならない。だが、社会民主主義的プロレタリア党のこの独自性は、現在の革命の時機に、共同の革命的攻撃が重要だということを、われわれに忘れさせることはけっしてないであろう。われわれ社会民主主義者は、プロレタリアートの階級的独自性を維持しながら、ブルジョア民主主義派の革命家たちとは独立にすすむことができるし、またすすまなけ

ればならないが、しかし、蜂起のときには、ツァーリズムに直接の打撃を加えるさいには、軍隊に反撃をあたえるさいには、また全ロシア人民の宿敵のバスティーユを攻撃するさいには、われわれは手に手をとってすすまなければならない。

いま全世界のプロレタリアートは、胸をとどろかせながら、かたずをのんで全ロシアのプロレタリアートを見守っている。わが国の労働者階級が英雄的にはじめた、ロシアにおけるツァーリズムの打倒は、すべての国の歴史における転換点となり、あらゆる民族、あらゆる国家、地球のあらゆる地点の、すべての労働者の事業を容易にするものとなるであろう。そして、すべての社会民主主義者、すべての自覚した労働者は、全人民的闘争のどんな偉大な任務がいま自分たちの双肩にかかっているかを、肝に銘ずべきである。自分たちは全人民の敵にたいして、全農民、全勤労・被搾取大衆、全人民の必要と利益とを代表しているということを、彼らは忘れてはならない。……」（前出、七七―八〇ページ、ゴシック体―山本）。

ところで、この一月革命の勃発に直面して、レーニンは、ここからどのようなことを学びとり、どのような「教訓」をひきだしているであろうか？　レーニンは、論稿『革命の日々』のうちの最初の小論、『ロシアでなにがおこっているか』のなかで、まず、こうした革命的動乱に直面して、社会民主主義者が真の革命的マルクス主義者としてどのような基本的考え方をし、どのような態度をとるべきかについて、つぎのような明確な原則を示している。

「……われわれは事件におくれずについていき、総決算をし、結論をひきだし、きょうの歴史の経験から、あすほかの場所で、つまり、きょうはまだ「人民が完全に沈黙をまもっている」が、近い将来になんらかの形で革命の火の手が燃えあがる場所で役に立つような教訓を汲みとるように、努力しなければならない。われわれは、政論家としての

不断の仕事をしなければならない。すなわち、現代の歴史を書かなければならないし、そして、われわれの時代描写が行動の現場で運動の直接参加者とプロレタリア的英雄にそれ相応の助けをもたらすように、それを書くことにつとめなければならない。つまり、運動の拡大をたすけるように、最小の労力で最大の、そしてもっとも確固たる成果をあげることのできる闘争の手段、方式および方法の意識的な選択をたすけるように書くことにつとめなければならない。

革命の歴史では、数十年、数百年を通じて成熟する諸矛盾がうかびあがってくる。生活は異常に豊富になってくる。いつもは日陰の生活をしており、そのためにしばしば皮相な観察者から無視され、もしくは軽蔑されさえする大衆が、積極的な闘士として政治舞台に登場する。この大衆は、万人の前で瀬ぶみをし、進路をさぐり、任務をさだめ、自分や自分のすべてのイデオローグの理論をためして、実践によって学ぶ。この大衆は、歴史によって負わせられた巨大な世界史的任務に応じようとして英雄的に努力する。そして、個々の敗北がどんなに大きいにせよ、鮮血の流れと数千の犠牲がどんなにわれわれを茫然とさせるにせよ、その意義からみて革命闘争そのものの行程での大衆と諸階級のこの直接の教育に匹敵しうるものは、なにもないし、けっしてないであろう。この闘争の歴史は、日を単位にして測らなければならない。……」（前出、八四ページ、傍点―山本）。

このようにして、さきにみたように、九つにのぼる小論によって、「革命の日々」をあとづけ、それぞれの意義を明確に指摘してきたレーニンは、二月はじめに、「革命の第一波が過ぎつつある」時機をとらえて、「革命の日々についていくつかの総括をおこない、教訓を引きだすようこころみる任務」がきわめて「緊切なもの」であることを強調して、彼自身、つぎのような「総括」と「教訓」をひきだしている。これは、未完の論文、『最初の教訓』からの

引用であるが、われわれは、そのなかにおいても、マルトフ、マルトィノフ、トロツキーらの新『イスクラ』派にたいする的確な批判があたえられていることに注意しなければならない。

「革命の日々をただしく評価するためには、わが国の労働運動の最新の歴史を概観しなければならない。ほぼ二〇年前の一八八五年に、中央工業地帯のモロゾフ工場その他で、最初の大規模な労働者ストライキがおこった。……そして、プロレタリアートは、経済闘争から政治的デモンストレーションへ、デモンストレーションから革命的襲撃へとうつりながら、なんという驚くべき速さで発展してきたことであろう！　とおってきた道の主要な道標をおもいおこしてみよう。一八八五年には、広範なストライキがおこり、それには、まったく個々ばらばらの、なんの組織にも結集されていない社会主義者がほんのすこし参加したにすぎなかった。……政府は、経済的譲歩に応じた。一八九一年には、シェルグノフの葬送のさいのデモンストレーションにペテルブルグの労働者が参加し、ペテルブルグのメーデーで政治的演説がおこなわれた。われわれの見たのは、先進的労働者の社会民主主義的デモンストレーションであり、大衆運動は欠けていた。一八九六年には、数万の労働者が参加したペテルブルグのストライキがあった。大衆運動は街頭宣伝の端緒をともない、すでに社会民主主義組織全体がこれに参加した。ほとんど学生のみから成るこの組織は、こんにちのわが党にくらべてまだどんなに小さなものであったにせよ、やはりその意識的・計画的な社会民主主義的関与と指導とによって、運動はモロゾフ・ストライキにくらべて巨大な規模と意義とをえたのである。政府は、再び経済的譲歩に応じた。ロシア全土にわたるストライキ運動に強固な基盤がすえられた。革命的インテリゲンツィアは、あげて社会民主主義者となった。社会民主党が創立された。一九〇一年、労働者は学生の援助におもむいた。デモンストレーション運動がはじまった。プロレタリアートは、専制を倒せ！　という自分たちの合言葉を街頭にもちだし

た。急進的インテリゲンツィアは、自由主義的インテリゲンツィア、革命的ブルジョア・インテリゲンツィア、および社会民主主義的インテリゲンツィアへ、最終的に分解した。革命的な社会民主党の諸組織のデモンストレーションへの参加は、ますます広範な、積極的な、直接的なものとなった。一九〇二年。ロストフの巨大なストライキは、すばらしいデモンストレーションに転化した。プロレタリアートの政治運動は、もはやインテリゲンツィアの、学生の運動と結びつかないで、それ自身ストライキから直接成長してきた。組織された革命的社会民主党の参加は、ますます積極的になった。プロレタリアートは、自分のためと自分たちの委員会の革命的社会民主主義者のために、大衆的な街頭集会の自由をたたかいとった。プロレタリアートは、はじめて自分自身を階級として、その他のすべての階級およびツァーリ政府に対置させた。一九〇三年。再びストライキは政治的デモンストレーションと融合したが、いっそう広範な基盤に立っていた。ストライキは一地帯全体をまきこみ、それには十万以上の労働者が参加した。ストライキのあいだにいくたの都市で大衆的な政治的集会がくりかえしひらかれた。われわれは、自分がバリケードの前夜にあることを感じた（一九〇三年のキエフの運動にかんする地方の社会民主主義者の批評）。しかし、この前夜は比較的長いものとなった。それはあたかも、強大な諸階級はときとして何ヵ月、また何年にもわたって力をたくわえるということにわれわれを慣れさせようとしているかのようであり、社会民主党に加わっている確信のとぼしいインテリゲンツィアを試験しているかのようであった。事実、わが党のインテリゲンツィア的な一翼、すなわち、新イスクラ派または（同じことであるが）ラボーチェエ・デーロ派は、はやくも、大恐慌をおこさせないという労働者とゼムストヴォ議員との協定といった形の「より高度の型」のデモンストレーションをさがしもとめはじめた。新イスクラ派はすべての日和見主義者につきものの無原則性をもって、政治的舞台には二つ（!!）の勢力、すなわち、官僚とブルジ

ョアジーがいるという、信じられないような、どうしても信じられないような命題をすでに吐くまでになった（ゼムストヴォ・カンパニアにかんする『イスクラ』編集局の第二の手紙を見よ）。新『イスクラ』の日和見主義者は、機会をつかまえようとしながら、プロレタリアートの独自の勢力のことを忘れてしまったのだ！　一九〇五年がやってきた。そして、一月九日は、またもやすべての風来小インテリゲンツィアを暴露した。プロレタリア運動は、たちまち、より高度の段階に高まった。ゼネラル・ストライキは、全ロシアにわたって、たしかに百万をくだらない労働者を動員した。社会民主党の政治的要求は、まだツァーリを信じかねないような、労働者階級の諸層にまでしみこんだ。プロレタリアートは警察的なズバトフ運動の枠をやぶり、革命とたたかうために設立された合法的労働者協会の全会員大衆は、ガポンとともに革命的な道にそってすすんだ。ストライキとデモンストレーションは、見る見るうちに、蜂起に転化しはじめた。組織された革命的な社会民主党の参加は、運動のこれまでの諸段階にくらべて、比較にならないほど顕著であったが、それでもまだ弱く、社会民主党の指導にたいする積極的なプロレタリア大衆の巨大な要望にくらべて弱かった。

全体としてストライキ運動とデモンストレーション運動は、さまざまな形態で、またさまざまな機因によって、たがいに一体に結合し、幅と深さを増し、ますます革命的になり、ずっと以前から革命的な社会民主党が論じてきた全人民的武装蜂起に、実践の上でますます近づいていった。この結論をわれわれは、すでに『フペリョード』第四号『ロシアにおける革命のはじまり』および第五号で一月九日の事件から引きだした。ペテルブルグの労働者自身もこの結論をただちに、直接に引きだした。一月十日に彼らは、合法的な一印刷所においしいって、つぎのようなビラを組み、これを一万部以上も印刷してペテルブルグ中にまいた。このビラはペテルブルグの同志たちからわれわれにおく

られてきた。以下にそのすばらしいビラをのせる。

「万国のプロレタリア、団結せよ！

市民諸君！　きのう諸君は、専制政府の蛮行をまのあたり見た！　街上に流された血を見た！　労働者の事業のための戦士が幾百人も殺されたのを見た、死を見た、傷ついた婦人や、みずから守るすべのない子供たちのうめきを聞いた！　労働者の血と脳みそは、彼ら自身の手によって敷かれた舗装道路に飛び散った。いったいだれが、軍隊と小銃と弾丸を労働者の胸にさしむけたのか？――ツァーリ、大公、大臣連、将軍連、宮廷のならずものどもだ。

彼らは殺人者である！――彼らに死をあたえよ！　武器をとれ、同志諸君、兵器廠を、武器庫を、武器店を奪取せよ。監獄をたたきつぶせ、同志諸君、自由のための戦士を解放せよ！　憲兵隊本部、警察署、すべての官庁機関を粉砕せよ！　ツァーリ政府を転覆し、われわれの政府をうちたてよう。革命万歳、憲法制定人民代表議会万歳！　――ロシア社会民主党」。

この檄文は説明を要しない。革命的プロレタリアートの自主活動は、そこにあますところなく表現されている。ペテルブルグ労働者の呼びかけは、彼らが望んでいたほど急速には実現しなかった。それは、さらにいくどもくりかえされるであろうし、これを実現しようとする企ては、さらにいくども失敗を重ねるであろう。しかし、労働者自身がこのように任務を提起したことの巨大な意義は、争う余地がない。革命運動は、この任務の実践的緊要性を意識させ、また、この任務がなにかの人民運動にさいして当面の日程にのぼされる時を近づけたが、この革命運動がなしとげた達成は、もはやなにものもそれをプロレタリアートから取り上げることはできない。[97]……」（前出、一一八―一二一ページ、傍点―レーニン）。

（97）ひきつづきレーニンは、「蜂起の思想の歴史についてすこしたちいって述べる必要がある。この問題について新『イスクラ』は、第六二号の永遠に記念すべき主張論文からはじめて、あいまいな月並文句、われわれの旧知のマルトィノフにまったくふさわしい、日和見主義的な混乱したことを、うんとしゃべりまくったので、古い問題提起を正確に再現することはとくべつ重要となっている」と述べ、つづいて、「レーニンの小冊子『なにをなすべきか』の終りの一三六ページで全人民的武装蜂起のスローガンが提出された。これについて一九〇二年の初めに、つまり三年前に、こう述べられていたのである。『人民蜂起のことを考えてみたまえ。われわれがこのことを考え、その準備をしなければならないということには、いまではおそらくだれもが同意するであろう……』」と記しているのであるが、残念ながら、草稿はここで未完のまま終っている。だが、ここに明示されてあるように、すでに一九〇二年、名著『なにをなすべきか』のなかで「全人民的武装蜂起」のスローガンが提起されていたこと、これが旧『イスクラ』の基本的路線のひとつであったことは、うたがう余地がない。ところが、わがバラライキン＝トロツキーは、この名著に接してはじめて『イスクラ』組織に入ることになったとその「自伝」の中で誇らしげに記しながら（一九二九年）、一九〇五年にこのスローガンが緊急の実践的課題となったときには、このスローガンをすっかり忘れてしまい、経済主義的日和見主義者の親方マルトィノフのお尻にくっついて、このスローガンをかかげているボリシェヴィキ党攻撃のための「綱領的」小冊子――『われわれの政治的任務』――を書きまくっているのである！

二十四

第一次ロシア革命勃発当時の情勢についてその大体の事情をみることができたので、つぎに本題の戦術の問題についてみることにしよう。周知のように、ボリシェヴィキとメンシェヴィキとの戦術の根本的対立が明瞭に示されたのは、一九〇五年五月ロンドンで開かれたボリシェヴィキだけのロシア社会民主労働党第三回大会の諸決議と、これにたいし同じときジュネーヴで開かれたメンシェヴィキ派の「協議会」の諸決議とにおいてである。この両派の諸決議の綿密な比較検討は、右の大会後まもなく発表されたレーニンの労作『民主主義革命における社会民主党の二つの戦

術』（一九〇五年七月）によってあたえられているので、つぎに、この労作に拠って、右の根本的対立の内容をとらえることにしよう。ところで、レーニンは、第三回党大会が召集される以前に、その召集の準備におわれているときにすでに、両派の戦術の根本的対立を明確にする論文をいくつかあらわしている。そこで、右の労作の検討にはいるまえに、それらの論文のうちの代表的なひとつについて、そのあらましをつかんでおくことがこのさい適当ではないかとおもわれる。この論文――『社会民主党と臨時革命政府』（一九〇五年四月）――は、その冒頭において、まず、問題の所在をつぎのように説明している。

「わずか五年前には、「専制をたおせ！」というスローガンは、社会民主党の代表者の多くには、時期尚早で、労働者大衆の理解できないもののように、おもわれていた。これらの代表者たちは、正当にも、日和見主義者にかぞえられた。彼らは運動からたちおくれているのだということ、彼らは階級の先進部隊としての党、階級の指導者および組織者としての党、全体としての運動の代表者、その根本的な、主要な目標の代表者としての党の任務を理解していないのだということが、彼らにむかって説明され、明らかにされた。これらの目標は、一時的には、毎日の日常的な活動によっておおわれてしまうことはあっても、たたかっているプロレタリアートにとっての導きの星という意義をけっして失ってはならないのである。

いまや時はきて、革命の炎が全国をおおっており、きわめて近い将来に専制の転覆が不可避であることを、もっとも懐疑的なものまでが信じるようになった。ところが、社会民主党は、まるでなにか歴史の皮肉ででもあるかのように、運動をうしろにひきもどし、それの任務をひくめ、そのスローガンをあいまいにしようとする同じ反動的、日和見主義的な試みを、もういちど相手としなければならなくなっている。このような試みの代表者との論戦が当面の任

務となり、（党内の論戦をあまり好まない、ひじょうに多くの人々の意見とは反対に）巨大な実践的意義をもってきている。なぜといって、われわれが当面の政治的任務の直接の実現に近づけば近づくほど、これらの任務を完全にはっきりと理解する必要はますます大きくなり、この問題におけるあらゆるあいまいさ、言いのこし、または思慮不足は、ますます有害になるからである。

ところで、思慮不足は、新イスクラ派、または（ほとんど同じものだが）ラボーチェエ・デーロ派の陣営に属する社会民主主義者のあいだには、はなはだすくなくない。専制をたおせ！――このことには、だれもみな賛成している。社会民主主義者がみな賛成しているだけでなく、民主主義者もみな、さらに、もし彼らがいま言明していることを信用するとすれば、自由主義者でさえみな、賛成している。だが、これはなにを意味するのだろうか？　政府の打倒は、いったい、どのようにしておこなわれなければならないのだろうか？　いまではオスヴォボジデーニエ派も憲法制定議会を――普通等々の選挙権の承認とともに――自己のスローガンとしてかかげる用意をもっているのだが、この憲法制定議会はだれが召集すべきなのか？　このような議会への選挙が自由であり全人民の利益を表現するという現実の保障は、いったい、なにになければならないのか？

これらの問題にたいして自分ではっきりした正確な答をあたえないものは、専制をたおせ！　というスローガンを理解しないものである。ところで、これらの問題は、われわれを不可避的に臨時革命政府の問題につれていく。専制のもとでは真の普通・平等・直接・秘密の投票を完全に保障する真に自由な、全人民的な憲法制定議会選挙は、ありそうもないばかりか、まったく不可能であることを理解するのは、むずかしいことではない。そして、もしわれわれが専制政府の即時打倒という要求をだてにかかげているのでないなら、われわれは打倒される政府を、いったい、ど

のような別の政府によって代えようとのぞんでいるのか、あるいは、言いかえれば、臨時革命政府にたいする社会民主党の関係をわれわれはどのように見るのかを、自分ではっきり理解しなければならない」（全集第四版、第八巻、二四九―二五〇ページ、傍点―レーニン）。

そこで、右の決定的に重要な問題について、「社会民主党の日和見主義者」＝新イスクラ派、すなわちメンシェヴィキがどのようにこたえているかということを示すために、レーニンは、その指導的人物のひとりでトロツキーの親密な戦友であるマルトィノフがことさら著わした小冊子『二つの独裁』をとりあげ、これに詳細な検討をくわえている。このマルトィノフの所論について、レーニンは、ほぼ二つの論点をとりあげてこれを吟味し、なおこれに関連してトロツキーの仲間であるパルヴスの所論にも検討を加えている。そこで、つぎに、マルトィノフの所論について、まず第一の論点からみていくことにしよう。

レーニンは、マルトィノフがその小冊子の冒頭で「つぎのように恐ろしい見通しによってわれわれをおどかしている」と述べて、マルトィノフの言葉を括弧つきで引用している。

「すなわち、もし革命的社会民主党の強固な組織が、レーニンの夢みているような、専制にたいする『全人民的武装蜂起の日取りを指定し、それを実行する』ことができるとすれば、『全人民の意志が、革命後すぐに、ほかならぬこの党を臨時政府に任命するだろうということは、明らかではなかろうか？　人民が、なにか別の党でなく、ほかならぬこの党に革命の当面の運命をゆだねるであろうということは、明らかではなかろうか？』と」（前出、二五〇―二五一ページ、『……』はマルトィノフの文章）。

右のマルトィノフの主張にたいして、レーニンはまず、こうした主張が、社会民主党内の日和見主義的翼、つまり

新イスクラ派＝メンシェヴィキの指導者層全体の考え方を示したものだということを明らかにする。

「これは、ありそうもないことであるが、事実である。ロシア社会民主党の未来の歴史家は、ロシア革命のごく初期に社会民主党のジロンド派がこのような見通しによって革命的プロレタリアートをおどかしたということを確認して、おどろかざるをえないであろう！　マルトィノフの小冊子（および新『イスクラ』の多くの論文と論文中の個々の箇所）の全内容は、この見通しの「さまざまの恐怖」をごてごて書きたてることに帰着する。新イスクラ派のこの思想的指導者には、そこに「権力の奪取」が見えるような気がし、革命につきまとっている老婆たちが政治上の子供たちをおどすのに好んでもちいる「ジャコバン主義」、バクーニン主義、トカチョーフ主義、その他の、恐ろしい主義（イズム）のおばけが見えるのである」（前出、二五一ページ、傍点―レーニン）。

ところで、日和見主義的修正主義者たちは、古今東西を通じて、かならず、その修正主義的主張を、マルクス・エンゲルスの労作からの引用によって「正当化」しようとつとめるものであって、メンシェヴィキの親方どもも、御多分にもれない。そこでレーニンは、右のような日和見主義的おとし文句をば、マルトィノフがマルクス・エンゲルスの労作からの引用によって「権威づけ」ようとはかっている点をとりあげ、マルトィノフの主張とマルクス・エンゲルスの所論とがどんなにかけはなれたものであるか、むしろ前者は後者をどんなにねじゆがめたこじつけにすぎないものか、ということをあきらかにする。

「もちろん、このばあいマルクスとエンゲルスからの「引用」なしにはすまされない。かわいそうなマルクスとエンゲルスよ、彼らの著述からの引用をなんと人は悪用することだろう！　諸君は覚えていられるだろうか、「階級闘争はすべて政治闘争である」という真理が、われわれの政治的任務と、政治的煽動および政治闘争の方法との狭さと立

ちおくれとを正当化するために、引合いにだされたことを。いまは、追随主義の弁護のための偽の証人として、エンゲルスが引きだされる。彼は『ドイツ農民戦争』のなかでこう書いた。「およそ最左翼党の指導者におこりうるいちばん悪いことは、自分の代表する階級が支配し、この階級の支配に必要な諸方策を実行しうるほど、運動がまだ成熟していない時期に、政権を握ることをよぎなくされる場合である」。わが追随主義者が右の筆者の思想をどんなに歪曲しているかを納得するためには、マルトィノフの引用している長い引用文のうちのこの始めのほうを、注意ぶかく読んでみるだけで十分である。エンゲルスは、階級の支配を保障する政権について述べているのである。これは明らかではないだろうか？　したがって、プロレタリアートにかんしていえば、これは、プロレタリアートの支配を保障する政権、すなわち、社会主義的変革をおこなうためのプロレタリアートの独裁である。マルトィノフはこのことを理解しないで、専制の転覆の時期における臨時革命政府を、ブルジョアジーの転覆の時期におけるプロレタリアートの確保された支配と混同し、プロレタリアートと農民の民主主義的独裁を、労働者階級の社会主義的独裁と混同しているのである。ところで、エンゲルスからの引用のそのさきを読むと、エンゲルスの思想は、さらにいっそう明らかになる。彼はこう言っている。この最左翼の党派の指導者は、「他の階級の利益を実行しなければならず、彼自身の階級にたいしては、空文句と約束で、この他の階級の利益はすなわち彼自身の階級の利益なのだという断言で、言いのがれなければならない。こういう誤った立場に落ちこんだものは、救うすべもなくほろんでしまう」。

傍点をつけた個所がはっきり示しているように、エンゲルスは、まさに、「自分の」階級の真の利益と変革の真の階級的内容とを指導者が理解しないことからおこる結果である、誤った立場に落ちこまないように、と警告しているのである。このことをもっと一目瞭然とわからせるために、簡単な一例でこれを噛みくだいてわが深遠なマルトィノ

フに説明してみよう。人民の自由派（ナロードナヤ・ヴォーリヤ）が、「労働」の利益を代表しているつもりで、将来のロシアの憲法制定議会では農民の九〇％は社会主義者であろうと、自分にも他人にも思いこませようとしたとき、彼らは、そのことによって、とりかえしのつかない政治的破滅へと不可避的に導く誤った立場におちこんだのである。なぜなら、これらの「約束や断言」は、客観的現実に合致していなかったからである。実際には、彼らは、ブルジョア民主主義派の利益、すなわち「他の階級の利益」を実行することになったであろう。……また、社会革命派が、ロシアがやがて不可避的に当面すべき農業改革を、「社会化」であるとか、「人民への土地の引渡し」であるとか、「平等の利用」の始まりであるとかえがきだすとき、彼らは、とりかえしのつかない政治的破滅に不可避的に導くべき、誤った立場に立つのである。なぜなら、実際には、彼らが達成しようとつとめている改革こそは、他の階級、すなわち農民ブルジョアジーの支配を保障するであろうからである。したがって、彼らの空文句、約束、断言は、革命の発展が急速であればあるほど、それだけはやく、現実によってくつがえされるであろう。いとも尊敬すべきマルトィノフよ、問題がどこにあるか、これでもまだあなたにはわからないだろうか？　エンゲルスの思想の核心は、変革の真の歴史的任務の無理解が破滅的であることを指摘する点にあり、したがって、エンゲルスの言葉は、わが国の人民の自由派や「社会革命派」にあてはまるものだということが、これでもまだわからないだろうか？」（前出、二五一―二ページ、傍点―レーニン）。

このように、レーニンは、「自分の」階級の真の利益と当面の変革の真の階級的内容とを明確に区別し関連づけることの重要性を指摘しているエンゲルスの文章を、マルトィノフがいかに誤解し、これをねじまげて彼自身の追随主義的戦術を「正当化」しようとしているかということを暴露し、ついで、エンゲルスの指摘とこれについてのマルトィノフの解釈＝「利用」の仕方との根本的なちがいを、つぎのように徹底的に論究している。説明の便宜のため、こ

れらの重要な相違点を箇条書きにして示してみよう。

1　エンゲルスは、プロレタリアートの指導者が変革の非プロレタリア的性格を理解しないのは危険だ、と指摘している。

ところが、マルトィノフは、ここから、綱領のうえでも戦術（つまり、宣伝・煽動の全体）のうえでも組織のうえでも革命的民主主義派から自分を垣で隔てたプロレタリアートの指導者が、民主的共和制の創設にあたって指導的役割をはたすことは危険だ、という結論をひきだす。

2　エンゲルスは、指導者が変革の仮想上の社会主義的内容と現実の民主主義的内容とを混同することの危険を説いている。

ところが、マルトィノフは、ここから、ブルジョアジーの支配の最後の形態であり、ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの階級闘争にとって最良の形態である民主的共和制を実施するさいに、プロレタリアートが農民とともに、意識して独裁を引受けることは危険だ、という結論をひきだす。

3　エンゲルスは、口ではあることをいいながら別のことをおこない、ある階級の支配を約束しながら実際には別の階級の支配を保障するという、虚偽の誤った立場を危険だ、と考えている。

ところが、マルトィノフは、ここから、プロレタリアートと農民が真の民主的共和制を保障しようとしても、民主主義のブルジョア的な味方がそうさせない結果として破滅[98]を招く危険がある、という結論をひきだす。

4　エンゲルスは、自分の階級の道から無意識に他の階級の道にそれていく人々の政治的破滅について語っている。

ところが、マルトィノフは、エンゲルスを引用しながら、これをひっくりかえして、正しい階級的な道をさきへさ

きへとすすんでいく人々の破滅について語るのである。

（98）レーニンは、この「破滅」という言葉について、つぎのような説明をつけ加えている。ここにも、真の革命的マルクス主義の立場を堅持する者とブルジョア民主主義派＝「純粋民主主義派」との根本的なちがいがあざやかに示されているといってよい。

「賢明なマルトィノフは、このような破滅、プロレタリアートの指導者の死滅、真の民主的共和制をめざす闘争における幾千のプロレタリアの死滅は、肉体的死滅であって、政治的な破滅でないばかりか、反対に、プロレタリアートのもっとも偉大な政治的獲得物であり、プロレタリアートが自由のための闘争においてそのヘゲモニーをもっとも偉大な形で実現したものであることを、どうしても理解することができないでいる」（前出、二五三ページ、傍点―レーニン）。

レーニンは、こうして両者のきわだった対立をあきらかにし、「ここには、革命的社会民主主義と追随主義との見解の相違が、もっとも明白にあらわれている」と述べて、つぎのように要約している。

「マルトィノフと新『イスクラ』は、プロレタリアートに農民とともに課せられている、もっとも徹底的な民主主義的変革の任務から後退し、またこの変革を社会民主主義者が指導することから後退して、こうして、たとえ無意識的にではあっても、プロレタリアートの利益をブルジョア民主主義派の手にゆだねるのである。われわれは、未来の政府党ではなく未来の反政府党を準備しなければならないという、マルクスの正しい思想から、マルトィノフは、われわれは現在の革命にたいして追随主義的な反政府派の立場をとらねばならない、という結論をひきだしている。彼の政治上の知恵は、これに帰着するのである」（前出、二五三―二五四ページ、傍点―レーニン）。

さらにレーニンは、マルトィノフの議論のいくつかをとりあげて、それがいかに混乱したものであるかを解きあかして、最後につぎのような結論づけを示している。われわれは、紙幅の関係上、それらの議論の内容にたちいること

をさしひかえ、その結論づけの部分だけを、つぎに引用して示すことにしよう。

「マルトィノフの混乱の源泉は、どこにあるのだろうか？　それは、民主主義的変革と社会主義的変革とを混同していることに、「ブルジョアジー」と「プロレタリアート」とのあいだに立っている中間的な人民層（都市および農村の貧民の小ブルジョア的大衆、「半プロレタリア」、半経営者）の役割を忘れたことに、われわれの最小限綱領の真の意義を理解していないことにある。マルトィノフは、社会主義者がブルジョア内閣に参加するのは（プロレタリアートが社会主義的変革のためにたたかっているときに）みっともないことであるということを耳にして、あわててこれをつぎのように「理解」したのである。すなわち、革命的なブルジョア民主主義派とともに、革命的民主主義的変革や、このような変革の完全な実現のために必要な独裁に参加してはならない、と。マルトィノフは、われわれの最小限綱領を読んだが、そのなかで、ブルジョア社会の基盤の上で実現することのできる改革を、社会主義的な改革と区別して、厳密にわけているのは、たんなる書物のうえの意義でなく、もっとも生き生きした実践的な意義をもっていることに、気づかなかった。彼は、革命期にはその綱領が即座の検証と実際の適用とを受けるということに、気づかなかった。マルトィノフは、専制の没落の時期における革命的民主主義的独裁という思想を拒否するのは、われわれの最小限綱領の実現を拒否するのにひとしいということを、考えなかった。実際、この綱領のなかにかかげられているすべての経済的および政治的改革、すなわち、共和制、人民の武装、国家からの教会の分離、完全な民主主義的諸自由、思いきった経済的改良の要求を、どうかおもいだしていただきたい。ブルジョア制度の基盤の上でこれらの改革を実行することは、下層の諸階級の革命的民主主義的独裁なしにはとうてい考えられないということは、明らかではないだろうか？　ここで問題になっているのが、まさに、「ブルジョアジー」と区別してのプロレタリアートだ

けでなく、あらゆる民主主義的変革の積極的な推進者である「下層諸階級」であるということは、明らかではないだろうか？　下層の諸階級とは、プロレタリアート、プラス小ブルジョア的な生存条件のもとで生活している幾千万の都市および農村の貧民である。この大衆の代表者のひじょうに多くのものがブルジョアジーに属していることは、疑いをいれない。だが、さらにいっそう疑うことのできないのは、民主主義の完全な実現がこの大衆の利益であるということ、また、この大衆が啓発されればされるほど、彼らがこの民主主義の完全な実現のために闘争することはますます避けられないものになる、ということである。社会民主主義者は、もちろん、都市および農村の小ブルジョア大衆の、二重の政治的＝経済的本性をけっして忘れることはないだろうし、また、社会主義のために闘っているプロレタリアートの別個の、独自の階級的組織化の必要を、けっして忘れることはないであろう。だが、社会民主主義者はまた、この大衆が、「過去のほかに未来を、偏見のほかに判断を」もっており、この判断は彼らを前方へ、革命的民主主義的独裁へとおしすすめることも、忘れはしないであろう。社会民主主義者は、啓発は本によってなされるだけではなく、いや、本によってなされるよりもむしろ、人間の眼をひからせ、政治的学校となる革命の推移そのものによってなされることを、忘れはしないであろう。このような事情のもとでは、革命的民主主義的独裁の思想を拒否するような理論は、政治的立ちおくれの哲学的正当化という以外には呼びようがない。

革命的社会民主主義者は、このような理論を軽蔑をもって投げすてるであろう。革命の前夜には、彼は革命の「悪い結末」を指摘するのにとどまらないであろう。いな、彼は、最良の結末の可能性をも指摘するであろう。彼はつぎのように夢みるであろう、――そして、もし彼が手のつけようのない俗物でないなら、彼はぜひともそう夢みなければならない。ヨーロッパの巨大な経験があったあとでは、またロシアの労働者階級のエネルギーが空前の規模で発揮さ

れたあとでは、われわれは、無知な、虐げられた大衆の面前に、革命の光明の燈火をかつてなかったほどに燃えたたせることに成功するであろう。われわれは――ヨーロッパのあまたの革命的世代の双肩にになわれているおかげで――空前の完全さですべての民主主義的改革を、われわれの最小限綱領の全体を、実現することに成功するであろう。われわれは、ロシア革命を数カ月の運動ではなく、数カ年の運動とならせ、それが、たんに権力の小さな譲歩に導くだけでなく、これらの権力の完全な覆滅に導くようにならせることに成功するであろう、と。そして、もしこれに成功すれば、そのときには……**そのときには、革命の大火はヨーロッパに燃えつくであろう。今度はブルジョア的反動につかれきったヨーロッパの労働者が立ちあがって、「どういうふうにやるべきか」を、われわれに示してくれるであろう。そのときには、ヨーロッパの革命的高まりはロシアに反作用をおよぼし、幾年かの革命期を幾十年かの革命期とするであろう。**(99) またそのときには、……だが、われわれには、「そのときには」われわれはなにをするかを、まだこれからいくたびも語るおりが――呪われた遠方のジュネーヴからでなく、モスクワやペテルブルグの街頭での何千人の労働者集会の前で、ロシアの「百姓」の自由な寄合いの前で語るおりが、あるであろう」（前出、二五七―二五九ページ、傍点―レーニン、ゴシック体―山本）。

(99) ロシア革命が旧権力の完全な覆滅に成功したあかつきには、「革命の大火はヨーロッパに燃えつき、そのヨーロッパの革命的昂揚がロシアに反作用をおよぼし、幾年かの革命期を幾十年かの革命期とするであろう」という、このレーニンの論述に注意されたい。「トゥーシノの渡り者」トロツキーは、おそらくこのレーニンの論文のこの個所を読んで、そのヒントにもとづいて、彼の得意とする「永続革命の戦術」なるものをたちまちひねりだしたものと推察される。彼は、一九〇六年に発表した彼の小冊子『結果と展望』を一九一九年になって再刊するにあたってことさらつけたした「一九一九年モスクワ版への序文」のなかで、「永続革命の戦術」を説明して、

「この立場が、一九〇四―一九〇六年にはじめて書かれていまここに再版されるこの労作のなかで、展開され、論じられている」(Leon Trotsky; The Permanent Revolution and Results and Prospects, Merit Publishers, New York, 1969, p.31)と書いている。だが、ロシア第一次革命におけるレーニンの戦術は、その第三回党大会の決議によっても明らかなように、けっして、「永続革命の戦術」ではないのである。このレーニンのうちたてた戦術とトロツキーが一九〇四―一九〇六年にうちたてたと称する「永続革命の戦術」とを比較すれば、トロツキーのそれがいかにでたらめの、根処なしの、大言壮語にすぎないかということは、明白なものとなる。この比較検討は、まもなくおこなわれるが、それにしても、一九〇五年当時、メンシェヴィキの尻尾にくっついてボリシェヴィキに毒づいていた「トゥーシノの渡り者」が、一九一九年になって、一九〇五年当時書いた空文句の羅列をば、「党指導者」としての「権威」をかさに、えらそうに再版し売りだすとは、また、なんと図々しいペテン師であろうか！

右にみられるように、新『イスクラ』派＝メンシェヴィキの致命的欠陥は、まさに、民主主義的変革と社会主義的変革とのあいだの根本的相違を認識することができず、したがって、ブルジョアジーとプロレタリアートとのあいだに立っていて民主主義的変革を支持することはできるが現在の時機に社会主義的変革を支持することのできない巨大な農民的・小ブルジョア的住民の存在とその役割とをみとめることができない、という点にある。そのために、「最小限綱領」のほんとうの意義をしかと理解することができず、「民主主義的変革の時期にプロレタリアートが社会主義革命によってブルジョアジーを威嚇しはじめるならば、それは、民主主義的獲得物を弱めるという反動にみちびくだけである」と考え、そこで、プロレタリアートと農民の革命的独裁にたいして強硬に反対をするのである。こういうことになるのは、結局、彼らの俗物的・小ブル的観念と思想をもってしては、事態の急速な前進におくれずについていくことがとうていできず、ましてや、正しい道をはっきり見定めて複雑なあたらしい問題をすみやかに解決するなどということはおろか、精々のところ運動をうしろにひきもどすということしかできないからである。彼マルトィ

ノフが「蜂起が成功したばあいには臨時革命政府に参加しなければならなくなる」といった「見通し」を宣伝してプロレタリアートをおどかしているのは、こうした彼らの反動的な追随主義、尻尾主義をもっとも端的に示しているものといってよい。

(100) 読者が容易に見てとることができるように、こうした「おどし」とか、反動的な尻尾主義といったものは、さきに前稿でみたメンシェヴィキの「ゼムストヴォ・カンパニア」とまったく同じ系列にぞくするものである。「おどし」と反動的尻尾主義との必然的な結びつき、――これは、日和見主義者＝修正主義者の本領を示したものであって、今日のわが国の修正主義集団にとってもそのきわだった特質を示すものとなっているといってよい。

なお、レーニンは、右の論文、『社会民主党と臨時革命政府』の終りの部分で、パルヴスを引合いに出し、彼パルヴスがメンシェヴィキの一員ではあるが、「革命を組織せよ」というスローガンを擁護して新『イスクラ』派をびっくりさせ、「革命的民主主義的独裁の思想を擁護し、社会民主党は専制を打倒したあとで臨時革命政府に参加する義務があるという思想を擁護して立ちあがった」ことを述べ、彼が若干の正しいスローガンをかかげて追随主義に反対している点をみとめる一方、パルヴスの誤った二つの主張をとりあげて、これに懇切な批判をあたえている。つぎにこれを簡単にみておくことにしよう。

第一にあげられている誤った主張――「もしわれわれが革命的プロレタリアートを他の政治的諸潮流から分離しようとおもうなら、われわれは、思想的に革命運動の先頭に立つことができなければならず」、「だれよりも革命的でなければならない」。

レーニンは、このはじめの文章は正しいが、あとの文章は正しくないとし、その理由として、「革命の危険な友人たち」が新『イスクラ』などの追随主義者ばかりでなく、「社会革命派」や、ナデジヂンら（「事件の流れにまきこまれて、革命的空文句にたいして無抵抗な人々」）や、ガポンら（「本能が革命的世界観の代用をしているような人々」）

からも成っていることをあげ、こうした「ロシアに存在しているさまざまな革命的潮流の総体」を考慮する必要を強調して、つぎのように教示している。

「このような条件のもとでは、われわれ社会民主主義者は、けっして「だれよりも革命的であれ」というようなスローガンをかかげることはできないし、またかかげもしないであろう。空文句をひけらかし、世間うけのする安直な（とくに、農業の分野で）スローガンにあこがれる、階級的基盤から切りはなされた民主主義者の革命性を、われわれは追いもとめようとは考えないだろう。われわれは、それとは反対に、このような革命性にたいしてはつねに批判的な態度をとり、言葉の真の意義、理想化されている大事件の真の内容を暴露し、革命のもっとも激烈な時機においてさえもろもろの階級や階級内部のもろもろの色合いを冷静に考慮することを教えるであろう」（前出、二六二ページ）。

第二の誤った主張――「ロシアにおける臨時革命政府は労働者民主主義派の政府であろう」、「もし社会民主党がロシアのプロレタリアートの先頭に立つなら、この政府は社会民主主義的政府となるであろう」、社会民主主義的臨時政府は、「社会民主主義者が多数を占める等質的な政府となるであろう」。

これにたいしてレーニンは、「偶然の、瞬時的なエピソードではなく、多少とも長期にわたり、歴史にその跡をとどめるような革命的独裁」について論じるなら、こういうことはありえないことだと指摘して、つぎのような説明をあたえている。

「こういうことはありえないというのは、いくぶんでも恒久的（もちろん、絶対的にではなく、相対的にであるが）なものとなることができるのは、人民の膨大な多数者に依拠する革命的独裁だけだからである。だが、ロシアのプロレタリアートは、いまや、ロシアの住民のうちでは少数である。それが膨大な、圧倒的多数者になることができるの

は、半プロレタリア、半経営主の大衆、つまり、都市および農村の小ブルジョア的な貧民大衆と結合する場合だけである。そして、ありうべき、望ましい革命的民主主義的独裁の社会的基盤のこうした構成は、もちろん、革命政府の構成に反映するであろうし、革命的民主主義派の種々雑多な代表者たちがこの政府に参加することを、またはそのなかで優勢を占めることをさえ、不可避とするであろう。この点について、どのようなものにもせよ、幻想をいだくのは、きわめて有害であろう」[101]（前出、二六二―二六三ページ、傍点―山本）。

（101）なおこれにすぐつづいて、レーニンは、大言壮語の達人、トロツキーの空文句――「司祭ガポンの出現のようなことは二度とありえないことだ」とか「第二のガポンが出る余地はない」とか、――をとりあげ、「これは、ひとえに、彼がむだ口屋だからである」と述べて、その根拠を示し、なお、こうしたむだ口がどんなにでたらめなはったりであって、とうていマルクス主義的戦術など論じうる資格のない、俗物的山師の空文句にすぎないかということを明確に説明している。「もしロシアには第二のガポンが出る余地がないのなら、わが国では、真に「偉大な」、最後までおしすすめられる民主主義革命の余地もないことになるであろう。民主主義革命が偉大なものとなるためには、そして一八四八―一八五〇年をではなく、一七八九―一七九三年を連想させそれを凌駕するためには、この革命は広大な大衆を積極的な生活に、英雄的な努力に、「根本的な歴史創造」に立ちあがらせ、恐ろしい無知から、かつて見たことのないほどの畏縮から、信じられないほどの野蛮化と光のない愚鈍から、立ちあがらせなければならない。革命はすでに彼らを立ちあがらせつつあるし、また立ちあがらせるであろう。……しかし、これらの大衆や、また数しれない「ロシア独自の」人民出身、いな百姓出身ですらある彼らの領袖たちが、よく考えぬいた政治的意識や、社会民主主義的意識をもっているなどということは、もちろん問題にならない。彼らは、いますぐ、いくたの革命的経験をへることなしに、社会民主主義者になることはできない。というのは、彼らが無知なためばかりでなく、（くりかえして言うが、革命は、作りばなしのような急速さで啓蒙する）彼らの階級的地位がプロレタリアートのそれではないからであり、現時機において歴史的発展の客観的論理が彼らの前に提出しているのは、けっして社会主義的変革の任務ではなく、民主主義的変革の任務だからである」（前出、二六三ページ）。

こうして、レーニンは、右の論文の末尾で、革命的プロレタリアートが当面する変革に全力をあげて参加し、事件の旋風のなかに階級的な明確さと意識性をもちこみ、革命的民主主義的独裁をめざし、共和制と完全な共和主義的自由をめざし、真剣な経済的改良をめざして奮闘し、これによって社会主義のための闘争舞台を自分たちのためにつくるべきことを強調しているが、そのさい、とくに社会民主主義者のあいだでのもっとも危険な二つの敵と徹底的にたたかってこれを粉砕する必要を的確に指摘している。その二つの敵とは、いうまでもなく、マルトィノフをはじめとする新『イスクラ』派の追随主義と、トロツキーにおいて典型的にあらわれている革命的空文句とである。

さて、以上によってボリシェヴィキと新『イスクラ』派＝メンシェヴィキとの闘争方針における根本的なちがいがほぼ明らかにされたので、つぎに両派がその戦術を定式化してうちだした第三回大会決議と「協議会」決議とについて、その決定的対立点をあきらかにするために、レーニンの労作、『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』をとりあげることにしよう。この労作は、たんに両決議の比較検討をおこなっているだけでなく、マルクス主義理論にとって、とくに経済理論と革命理論との不可分の関連にかんして、きわめて含蓄に富んだ叙述を少なからずふくんでおり、それらの奥深い内容の理論的・実践的意義をとらえることはきわめて肝要である。そこで紙数の許すかぎり、丹念にその内容の吟味をおこなうことにしたいと考える。

二十五

レーニンの有名な労作『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』は、一九〇五年七月に公刊され、「まえがき」と十三の節から成り立っている。われわれはまず、「まえがき」のなかの重要とおもわれる個所をとりだして

かかげ、そのつぎに、十三の節のうち、とりわけ当面の問題にかんして決定的に重要な意義をもつ叙述をふくんでいるものをとりあげて、それらの意味内容を吟味することにしたいとおもう。

その「まえがき」では、レーニンはまず、革命が、「平和な政治的発展の時代にはとてもありそうもないとおもわれるほどすみやかに、また徹底的に、人々を教育する。しかも革命は、指導者を教育するだけでなく、大衆をも教育する」ことを指摘し、ついで、「闘争している政党」にとっての現在の問題は、「われわれが革命になにかを教えこむこと」が、「革命にわれわれの刻印をおし、じっさいに革命を真の決定的勝利にみちびき、民主主義的ブルジョアジーの動揺性と中途半端性と裏切りを麻痺させること」ができるかどうか、ということであると述べ、「われわれがいっさいの努力をむけなければならないこの目標を達成できるかどうかは、一方では、政治情勢についてのわれわれの評価が正しいかどうか、われわれの戦術的スローガンがまちがっていないかどうかにかかっているし、他方では、これらのスローガンが労働者大衆の現実の闘争力によって支持されるかどうかにかかっている」と説明する。そして、もっとも緊切な「労働者階級の教育と組織」について、「いまもっぱら問題になっているのは、この教育とこの組織との主要な政治的重心をどこにおくか、労働組合や合法的協会におくのか、それとも武装蜂起や、革命軍と革命政府を創設する仕事におくのか？　ということである」と述べ、戦術的スローガンをとりあげることの決定的な意義と必要とをつぎのように明確にしている。

「社会民主党が正しい戦術的スローガンをもつことは、いま、大衆の指導にとってとくに重要な意義をもっている。革命時に原則的に一貫した戦術的スローガンの意義を低く見ることほど危険なことはない。たとえば、『イスクラ』は第一〇四号で、社会民主党内の自分の反対者の立場に事実上移りつつあるが、しかも同時に、運動が一連の失敗や

誤りなどをともないながらもすすんでいく道をさし示す、生活にさきんじたスローガンや戦術的決定の意義を軽んずる意見を吐いている。これに反し、事件のあとからよちよちついていくにとどまらないで、マルクス主義の一貫した原則の精神にしたがってプロレタリアートを指導しようとのぞむ党にとっては、正しい戦術的決定をつくりあげることは、きわめて重大な意義をもっている。ロシア社会民主労働党第三回大会の諸決議と党の離脱部分の協議会の諸決議は、個々の文筆家たちがたまたま述べた見解ではなく、社会民主主義的プロレタリアートの責任ある代表者たちが採択した戦術上の見解の、もっとも正確で、もっともよく考えぬかれた、もっとも完全な表現である。わが党は、全党員によって採択された正確な綱領をもっている点で、他のすべての党よりもすすんでいる。わが党は、『オスヴォボジデーニエ』の民主主義的ブルジョアジーの日和見主義とは反対に、また革命時になってやっと綱領「草案」を提出しようとか、眼前におこっている革命がブルジョア革命かどうかという問題の究明にはじめてとりかかろうとか思いつく社会革命派（エス・エル）の革命的空文句とは反対に、自党の戦術的決議に厳格な態度をとる点でも、他の諸政党に模範を示すべきである。

まさにこの理由から、われわれは、ロシア社会民主労働党第三回大会と「協議会」の戦術的諸決議を綿密に研究し、そのなかにマルクス主義の原則からのどういう逸脱がふくまれているかを見きわめ、民主主義革命における社会民主主義的プロレタリアートの具体的任務をはっきり理解することを、革命的社会民主主義派のもっとも緊要な仕事であると考える。この小冊子もほかならぬこの仕事にささげられているのである。マルクス主義の原則と革命の教訓という見地からわれわれの戦術を検討することは、訓戒の言葉を吐くだけで事足れりとしないで、ロシア社会民主労働党全体の将来の完全な統合の基礎としての戦術の統一を現実に準備しようとのぞんでいる人々にとっても必要なことで

ある」（全集第四版、第九巻、五―六ページ、傍点―山本）。

ここに明示されているように、マルクス主義の一貫した原則に厳密に則した戦術をうちたてること、(102) しかも革命の教訓によってこれに綿密な検討をくわえることこそが、革命的社会民主主義派、いいかえれば革命的マルクス主義派にとって当面のもっとも緊要な任務であると、レーニンは的確に規定しているのであって、このもっとも緊切な任務にとりくみこれを正しく解決したものこそが、レーニンの主宰したロシア社会民主労働党第三回大会であり、そこで決定された決議である。

(102) この「マルクス主義の原則に厳密に則した戦術をうちたてること」という、文字に注意されたい、これはけっして簡単にできることではない。マルクス主義の原則の正確な把握および現実の革命情勢の的確な分析とそれへの原則の正しい適用によって、しかもレーニンの教示しているように、革命の教訓を十分に学びとりこれによって戦術をたえず吟味することによってはじめて、右のような真に革命的マルクス主義の正しい戦術がうちたてられるのである。今日、わが国で「共産党」を僭称する日和見主義＝修正主義集団が、その本性にふさわしく、「一票」獲得に血道をあげてなんらの戦闘目標もかかげえないのも、また、「革命的マルクス主義」を呼号する左翼小インテリ集団が煽動政治屋トロツキーをかつぎまわって、マルクス主義の一貫した原則を見失い、プロレタリアートの革命的戦術の必要すら忘れているのも、まことに理の当然といってよい。

右の労作の本文は、「一　緊要な政治問題」からはじまっているが、この「一」で、レーニンはまず、「いま日程にのぼっているのは、全人民的憲法制定議会を召集する問題である」と述べ、この問題の解決をめぐって、ロシアの三つの主要な社会的勢力に対応する三つの主要な政治的流派がみられるといって、つぎの三つをあげている。

1　ツァーリ政府――人民代表を召集する必要はみとめているが、しかし、その議会が全人民的なものに、また憲法を制定する議会になるのを許す気はまったくない。煽動の自由を奪ったままで、狭い制限選挙制または狭い身分別

選挙制によって選挙される諮問議会が狙いである（ブルィギン委員会）。

2　革命的プロレタリアート――社会民主党が指導しているかぎりでは、権力を憲法制定議会に完全にうつすことを要求し、そのために普通選挙権と煽動の完全な自由をえようと努力しているだけでなく、さらにツァーリ政府の即時打倒と臨時革命政府によるそのおきかえをかちとることをめざしてたたかっている。

3　自由主義的ブルジョアジー――ツァーリ政府の打倒を要求せず、臨時政府のスローガンをかかげず、したがって選挙が完全に自由で正しいものとなり、代表議会が真に全人民的で真に憲法を制定する議会となりうるための現実の保障をもうけることを主張しない（立憲民主党（カデット））。「オスヴォボジデーニエ派」の流派の唯一の重要な社会的支柱である自由主義的ブルジョアジーは、本質上は、ツァーリと人民とのできるだけ平和な取引を、しかも彼らブルジョアジーには最大の権力があたえられ、革命的人民、すなわちプロレタリアートと農民には最小の権力しかあたえられないような取引を、もとめている。

以上のように当面の政治情勢を特徴づけたのち、レーニンは、この労作での課題を「社会民主主義者が現時機の任務をどうとらえているか」の考察に限定し、そのための「絶好の材料」としてとりあげられるのが、第三回党大会と「協議会」とがそれぞれ採択した二つの決議であると述べ、当面究明されるべき重大な問題は、まさに「この二つの決議のうち、どちらが当面の政治情勢をより正しく考慮し、革命的プロレタリアートの戦術をより正しく規定しているか？」ということにあるとして、問題究明をつぎのような説明をもってはじめている。

「政党の戦術というのは、その党の政治的態度、いいかえれば、その党の政治活動の性格、傾向、方法のことである。戦術上の決議は、新しい任務に関連して、あるいは新しい政治情勢に直面して、党の政治的態度を全体として厳

密に規定するために、党大会によって採択されるものである。ロシアにはじまった革命は、こうした新しい情勢を生みだした。すなわち、人民の圧倒的多数がツァーリ政府から完全に、断固として、公然と離反したことがそれである。新しい問題は、真に全人民的で、真に憲法を制定する議会を召集する実際的方法は、どのようなものか、という点にある（理論的には、このような議会の問題は、すでにずっと前に社会民主党が、他のすべての政党にさきんじて正式に党綱領のなかで解決したところである）。もしも人民が政府からすでに離反しており、新しい秩序をうちたてなければならないということが大衆に意識されているとすれば、政府の転覆を目標にしている党は、転覆される古い政府のかわりにどのような政府をつくるかを、ぜひ考えてみなければならない。臨時革命政府という新しい問題が生まれてくる。この問題に完全な解答をあたえるためには、自覚したプロレタリアートの党は、第一に、現在おこなわれている革命における、また一般にプロレタリアートの全闘争における臨時革命政府の意義、第二に、臨時革命政府にたいする党自身の態度、第三に、この政府に社会民主党が参加するための厳密な条件、第四に、下から、すなわち社会民主党がこの政府に参加しない場合に、この政府に圧力をくわえる条件を、明らかにしなければならない。これらの問題をすべて明らかにする場合にのみ、この点における党の政治的態度は、原則的な、明瞭な、確固たるものとなるであろう」（前出、八―九ページ、傍点―レーニン）。

こうして「新しい政治情勢」が提起している緊要な「新しい問題」にたいして、ロシア社会民主労働党第三回大会の決議が、どのような解決をあたえているかということを明らかにするために、レーニンは、その決議全文を明記している。われわれも、行論での吟味にそなえて、その全文をつぎにかかげておくことにしよう。

「臨時革命政府についての決議

(一) プロレタリアートの直接の利益も、社会主義の終局目標をめざすプロレタリアートの闘争の利益も、できるだけ完全な政治的自由を要求しており、したがって、専制的統治形態を民主的共和制でおきかえることを、要求している。

(二) ロシアにおける民主的共和制の実現は、**勝利した人民蜂起の結果としてのみ可能**である。この**人民蜂起の機関が臨時革命政府**であり、これのみが選挙前煽動の完全な自由を保障することができ、また秘密投票による普通・平等・直接の選挙権にもとづいて、人民の意志を真に表明する憲法制定議会を召集することができる。

(三) ロシアにおけるこの民主主義的変革は、ロシアの現在の社会経済制度のもとでは、ブルジョアジーの支配を弱めずに、これを強めるであろうし、ブルジョアジーは、ある瞬間には、なにものにも躊躇することなく、ロシアのプロレタリアートから革命期の獲得物のできるだけ多くの部分を奪いとろうと、かならずこころみるであろう。

以上の点を考慮して、ロシア社会民主労働党第三回大会は、つぎのように決定する。

(イ) 革命のもっとも予想される経過についての、また、革命のある瞬間に臨時革命政府が必然的に出現し、プロレタリアートはこの政府にたいしてわれわれの綱領（最小限綱領）の当面の政治的および経済的諸要求のすべてを実現するように要求するであろうということについての、具体的な観念を、労働者階級のあいだにひろめることが必要である。

(ロ) 力関係、その他あらかじめ正確に規定できない要因のいかんによっては、すべての反革命的企図と容赦なく闘争し、労働者階級の独自の利益をまもるために、わが党の全権代表が臨時革命政府に参加することはゆるされる。

(ハ) このような参加の必要条件としては、党がその全権代表を厳重に統制すること、完全な社会主義的変革をめざ

し、そのかぎりですべてのブルジョア政党に非妥協的に敵対する社会民主党の独立性をたゆみなくまもることがあげられる。

(二) 臨時革命政府に社会民主党が参加することが可能かどうかにはかかわりなく、革命の獲得物をまもり、うちかため、拡大するために、**社会民主党に指導される武装したプロレタリアートが臨時革命政府にたえず圧力をくわえる必要**があるという思想を、プロレタリアートのもっとも広範な諸層のあいだに宣伝すべきである」(前出、九—一〇ページ、傍点—レーニン、ゴシック体—山本)。

この決議がどれだけ重要な内容をふくんでいるかということを、レーニンは、つぎの「二」で明確にしている。ここでは、そのうちの主な要点を——箇条書きで——摘記することにしよう。

1 決議は臨時革命政府のことだけをとりあげ、「権力奪取」の問題やこれに類する諸問題はとりのぞいている。これらの問題は、ロシアの政治情勢においてまだ日程にのぼっておらず、全人民が日程にのぼせているものは、専制の転覆と憲法制定議会の召集である。

2 臨時革命政府の意義(現在の革命における、また、プロレタリアートの一般的闘争における)。——プロレタリアートの直接の利益からみても、「社会主義の終局目標」から見ても、「できるだけ完全な政治的自由」が必要であり、そのためには、ツァーリ専制を民主的共和制におきかえることが必要である。共和制を樹立するためには、人民代表議会、しかも必ず全人民的(秘密投票による普通・平等・直接選挙権にもとづく)で、憲法を制定する議会が絶対に必要である。だが、この議会は形式的スローガンにとどまってはならず、「憲法を制定する」権力と実力とをもつことが必要である。選挙前煽動の完全な自由を保障することができ、また人民の意志を真に表明する議会を召集す

ることができるのは、臨時革命政府だけであり、しかも勝利した人民蜂起の機関であるような臨時革命政府だけである。

ただし、民主主義的変革がブルジョアジーの支配を強めるであろうこと、ブルジョアジーは「プロレタリアートから革命期の獲得物をうばいとろう」と死にものぐるいで企てるであろうこと、ブルジョア民主主義の胎内にひそむ新しい矛盾と新しい闘争のことを、プロレタリアートは一瞬間も忘れてはならない。

3　臨時革命政府にたいするプロレタリアートの立場。――臨時革命政府が必要であるという確信を労働者階級のあいだにひろめる。そして、現在の歴史的時機の客観的諸条件とプロレタリア民主主義派の諸任務とに合致したこの政府の行動綱領、すなわち最小限綱領を示さなければならない。

4　要するに、臨時革命政府は、その起源と基本的性格からいえば、人民蜂起の機関でなければならず、その形式的な使命からいえば、全人民的憲法制定議会を召集する道具でなければならず、その活動の内容からいえば、専制に反対して蜂起した人民の利益を確保できる唯一の綱領である、プロレタリア民主主義派の最小限綱領を実現するものでなければならない。

5　臨時革命政府への参加の問題。――臨時革命政府に社会民主党が参加することは（民主主義的変革の時代、共和制をめざす闘争の時代に）原則上ゆるされる。（この問題にたいして原則上否定的な答をする無政府主義者、われわれが参加しなければならないような事態が来るという見通しでわれわれをおどかしてきた社会民主党の追随主義者（マルトィノフや新イスクラ派）との決定的分離。こうした参加はミルラン主義の一変種だとか、この参加はブルジョア制度を神聖化するもので原則的に許しえないとかいう、新イスクラ派の思想の決定的排撃）。

ただし、原則的にゆるされるということでは、実践的に適切かどうかは決定されない。そのための諸条件は、あらかじめ規定することはできない。ただ、この参加の性格と目的とを明確に規定しておかねばならない、――㈠反革命的企図と容赦なく闘争すること、㈡労働者階級の独自の利益を守ること。上からの行動という思想を宣伝し、もっとも精力的な攻撃的な行動の準備をし、こうした行動と形態を研究しなければならない。

さらに、決定的に重要なことは、臨時革命政府にたいして、つねに下から働きかけることである。下からの圧力を加えるために、プロレタリアートは武装していなければならない（なぜなら、革命の時機には、事態はとくに急速に本格的な内乱に発展するからである）し、また社会民主党によって指導されなければならない。プロレタリアートの武力による圧力の目的とするところは、革命の獲得物、すなわち最小限綱領全体の実現をば、まもり、うちかため、拡大することにあるのである。

以上が、第三回大会の決議の大体の要点である。では、これにたいして、第三回大会に反対した分離組＝「協議会」のうちだした決議の内容は、どんなものであろうか？

レーニンの労作のうち、「三」から最後の「十三」にいたるまで、実に十一にのぼる節の内容は、その全文がことごとく「協議会」の決議の批判にあてられている。それらの節全体にわたって展開されている、新『イスクラ』派＝メンシェヴィキ理論の徹底的・根本的批判のなかには、きわめて重要かつ緊切な――ときとしては、決定的とさえいえるほどの――意義をもっている主張が多々ふくまれている。そして、これらの重要な主張について、その奥深い意味内容を十分ただしくとらえることは、革命的マルクス主義の真髄を認識するうえで、したがってまた、「トゥーシノの渡り者」トロツキーの本質を見きわめ、左右の日和見主義者＝修正主義者たちによるマルクス主義の歪曲、改ざ

んを徹底的に追究するうえで、不可欠の要件をなしているということができる。それと同時に、それはまた、経済と政治との関連の科学的把握という、拙稿主題の目標にむかって数歩をすすめるものとして適切な意味をもつものといえよう。こうしたことを念頭において、レーニンの労作の「三」以下を順次に検討していくことにしよう。

まず、「三　「ツァーリズムにたいする革命の決定的勝利」とはなにか？」について。

レーニンは、まず、「協議会」の決議が、「権力の獲得と臨時政府への参加」という問題にあてられている点をあげて、これにつぎのような的確な批判をくわえている。

「……問題のこういう出し方そのもののうちに混乱がひそんでいる。一方では、問題の出し方がせまく、臨時政府へのわれわれの参加を問題にしているだけで、一般的に臨時革命政府にたいする党の任務を問題にしていない。他方では、二つのまったく別種の問題を混同している。すなわち、民主主義的変革のひとつの段階にわれわれが参加する問題と、社会主義的変革の問題とを混同している。じっさい、**社会民主党による「権力の獲得」ということは、この言葉をその直接の普通の意味でつかうとすれば、まさに社会主義的変革であって、それ以外のなにものでもない。**(103) もしまたこの言葉を社会主義的変革のためでなく民主主義的変革のために権力を獲得するという意味にとるとすれば、臨時革命政府への参加について語るだけでなく、「権力の獲得」一般についても語っていることに、どういう意味があるのか？　あきらかに、わが「協議会派」は、そもそもなにを問題にしなければならないのか、民主主義的変革かそれとも社会主義的変革かが、自分でもよくわかっていなかったのである」（前出、一七ページ、傍点―レーニン、ゴシック体―山本）。

(103)　ここに記されたレーニンの指摘は、トロツキーの革命的空文句の正体を見ぬくうえで、きわめて重要な意義をもってい

る。プロレタリアート党による「権力の獲得」がどういうことを意味しているかということもわけわからずに、一九〇六年の小冊子『結果と展望』や一九一五年の小論『権力のための闘争』のなかで、やたらと「権力獲得」のことを書きたてているこの煽動政治屋が、新『イスクラ』派とまったく同じ水準に立っていること、つまり、問題となっているのが、そもそも、民主主義的変革なのか、それとも社会主義的変革なのかということがちーっともわからない手合であるということは、行論において明らかにされるところである。

「協議会」の決議の表題そのものがすでに示している「混乱」を指摘したのち、レーニンは、「決議の内容は、さらに比較にならないほど深刻で重大な誤りをわれわれに示している」と述べて、まず決議の最初の部分をとりあげ、これについて検討をくわえている。その部分はつぎのとおりである。

「ツァーリズムにたいする革命の決定的勝利は、勝利した人民蜂起のなかから出現した臨時革命政府の樹立にあらわれるか、あるいは、なんらかの代議機関が人民の直接の革命的圧力のもとに全人民的憲法制定議会を組織することを決定して革命的イニシァティヴをとるということにあらわれるか、そのどちらでもありうる」（前出、一八ページ）。

みられるように、「協議会」派は、「ツァーリズムにたいする革命の決定的勝利」が、「勝利した蜂起」でもありうるし、また「憲法制定議会を組織するという代議機関の決定」でもありうる、と言う。レーニンは、「これは、いったい、なんなのか？」と嘲笑の言葉をあびせ、彼らが「憲法制定議会を組織するという決定は、言葉のうえだけの革命の勝利を意味するにすぎない」ことに気づきもしないことを指摘し、つぎのような批判をくわえる。

「メンシェヴィキ＝新イスクラ派の協議会は、自由主義者やオスヴォボジデーニエ派がたえず陥っているのと同じ誤りに陥ったのである。オスヴォボジデーニエ派は、実力と権力がツァーリの手に保持されていることには、はずかしげに目を閉じ、「憲法を制定する」ためには憲法を制定する実力をもっていなければならないということを忘れて、

「憲法制定」議会についての空文句をこととしている。[104] 協議会はまた、どんな代表が採択したものにせよ、「決定」とこの決定の実行とのあいだには大きな開きがある、ということも忘れてしまった。協議会はまた、権力がツァーリの手中にのこっているかぎり、どんな代表のどういう決定も、ちょうど一八四八年のドイツ革命史上に有名なフランクフルト議会の「決定」と同じように、からっぽの、やくざなおしゃべりを出ないものになってしまうということも、忘れてしまった。革命的プロレタリアートの代表者であるマルクスは、この理由で彼の『新ライン新聞』紙上でフランクフルトの自由主義的「オスヴォボジデーニエ派」を、容赦ない皮肉でやっつけた。それはまさに、彼らがりっぱな言葉をしゃべり、あらゆる種類の民主主義的「決定」を採択し、あらゆる種類の自由を「憲法に制定」しながら、実際には権力を国王の手にのこし、国王の支配下の軍事力との武装闘争を組織しなかったからである。そして、フランクフルトのオスヴォボジデーニエ派がおしゃべりをしているあいだに、国王は時機のくるのを待ちうけ、自分の軍事力をつよめたし、反革命勢力は、実力にたよって、この民主主義者らをそのみごとな「決定」もろとも徹底的に粉砕してしまったのである。

協議会は、まさに勝利の決定的条件の欠けているものを、決定的勝利と同列においたのである。……」（前出、一八一九ページ、傍点―レーニン）。

(104)　「実力と権力が支配階級の手に保持されていることに、そして金融寡頭制がますますその官僚的軍事的国家機構を強化しつつあることには、はずかしげに目を閉じ、その『支配体制を変革する』ためには変革を遂行する実力と強力とをもっていなければならないことを忘れて、『ブルジョア的議会制度』についての空文句をふりまわして、真面目な勤労人民をたぶらかしている」――これは、今日のわが国のオスヴォボジデーニエ派、つまり、「日共修正主義集団」を予想してレーニンが用意しておいてくれた科学的規定といってよい。

レーニンはさらに、「革命的精神がどれほど彼らから飛びさってしまったか、生気のない理屈が現時機の闘争任務をどれほど彼らの目からさえぎってしまったかは、彼らがその決議のうちで、まさに共和制に言及するのを忘れたことから、とくにはっきりとうかがわれる」（前出、二二ページ、傍点―レーニン）と述べ、右の決議の最初の部分について、つぎのような「総括」をあたえている。それは、

「㈠共和制のために闘争し、真に全人民的な真に憲法を制定する議会を保障するという見地からみた臨時革命政府の意義を、まったく明らかにしていない。㈡まさに真の勝利の基本的条件がまだ欠けているような事態をツァーリズムにたいする革命の決定的勝利と同列におくことによって、プロレタリアートの民主主義的意識のなかに、まったくの混乱をもちこんだ」（前出、二二―二三ページ）。

そこで――節をあらため――、つぎに「**四**　君主制の廃止と共和制」以下の内容を吟味することによって、両決議の決定的相違点をとらえることにしよう。

（一九七二・九・一八）